トークショー
「富山盲唖学校の消滅」

司会／野崎　誠　証人／竹川秀夫・伊藤サト

司会：皆さんおはようございます。朝の10時と皆さんお早くお集まりいただきましてご苦労様です。司会を担当します野崎誠と申します。よろしくお願いします。富山ろう学校を卒業しました、富山生まれです。今、東京にすんでいます。橘実行委員長からいろいろ応援を受けて、その恩返しとして実行委員会に手助けをするべく参加しました。いろいろと至らぬところがあるかと思いますが、よろしくお願いします。

まず、注意をお願いしたいのですが、この会場での写真撮影はご自由に撮影していただいて構いませんが、フラッシュに関しては、ご遠慮いただきたいと思います。また、ビデオ撮影はご遠慮願いたいと思います。

今日一日については、まず午前中は、10時から11時までトークショーをやります。内容は、盲ろう学校の様子について二人の方にお話していただきます。11時からはろうの校長先生ということで、その方についていろいろとトークショーを行います。私の担当は10時から11時までの1時間です。司会を担当しますのでよろしくお願いします。ではお二人の方、盲ろう学校の経験をしたお二人です。名前は竹川秀夫さんと、もう一方は伊藤サトさんのお二人です。皆さん拍手をお願いします。

今からトークショーを始めたいと思います。まず竹川さんの方から。竹川秀夫さんです。そのおとなりは伊藤サトさんです。盲ろう学校を卒業した経験者という事で、お二人御招きしました。非常に貴重なお話をしていただけるものと思います。いろいろ話し合いをしながら進めていきたいと思います。私は富山県立富山ろう学校を卒業したのですが、盲唖学校となっていますね。この学校についてはまったく知りません。盲唖学校の様子はどんな様子だったか、いろいろ聞きたいと思います。最初に盲唖学校の様子はどうだったかといった事を簡単に伊藤サトさんからお話してほしいと思うのですが、変更して、それでは最初に竹川さんからお話して頂きます。

竹川：今、紹介していただきました、これは、並

木文右衛門さんです。この方が盲学校の創設者です。明治40年２月27日に不幸な人達、視覚障害者、盲者のために、いろいろ援助していこうと救済を決意して、盲学校を創設することを考えたわけです。明治40年の少し前ごろの話しですが、富山市に住んでいましたが、傷痍軍人（戦争に行って怪我をして帰って来た人達）が金沢陸軍予備病院で治療を受けていたわけです。そこで、金沢まで行って、傷痍軍人の人達の様子を並木文右衛門さんは見て、なんとかそういう人たちを助けたいと、将棋版や碁盤を50個贈るなどの寄付も行っていました。その当時、かなり高価な物だったと思います。そういった慰問をずっと続けてきたわけです。傷痍軍人の中に失明した(視力を失った)方がいて、そういう人達は大変だから、何か援助は出来ないかと、盲学校の設立を考えたわけです。

司会：では伊藤サトさんに盲唖学校の様子についてお話をお聞きしたいと思います。

伊藤：学校があると知って、弟と一緒に学校に入りました。金沢の方にしばらく行っていました。金沢の学校の方から二人来て、１年か３年ぐらいそちらの方にも行っていました。

司会：金沢の方に３年間通っていて、その後、富山に学校が出来たのですか？

伊藤：そうです。

司会：学校に入った時のコミュニケーションの方法についてですが、ろうの友達とは手話があったと思いますが、盲の人達とどうやってコミュニケーションをとっていたのか聞きたいです。

伊藤：実は、開校当初は、盲学校だけだったのですが、たまたま近くの富山市千石町に校舎が建ったのです。当時、私(伊藤)は７歳でした。その時の校舎の写真は無いですが、形を自分なりに思い

出して描いてみた校舎が、今、スライドで出ている絵です。

竹川：私が赤ん坊の頃、昭和6年に伊藤さんは設立された学校に入ったわけですね。その時の、ろうあ者の人達とのコミュニケーションはどうだったのですか？

伊藤：５～６人位だったと思いますが、千石町の学校に入ったのです。

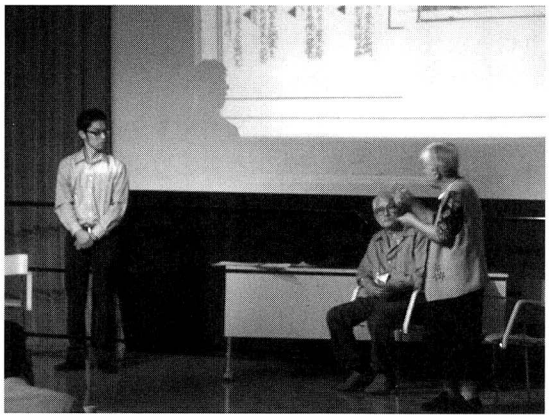
司会：ろう者同士の話はほとんど分かったということですが、富山空襲の後、焼失してしまったようですね。その、空襲の経験についてはどうなのでしょうか？

竹川：昨日、空襲については、いろいろお話ししましたけれども、盲ろう学校ということで、手話は禁止されていたのですか？

伊藤：ええ。手話は禁止でした。口話だけで話しをしていました。

竹川：学校に入ってからも手話は禁止だったのですか？

伊藤：そうです。手話はわからなかったです。初等科４年ぐらいになってから少しわかってきたのですが、世を忍んでやっていました。手話はずっと禁止でした。



司会：手話はどうでしたか？

竹川：手話は禁止でした。話しは変わります。明治の初めに並木さんがどうやって生徒を集めたのかについてですが、生徒にあだ名などをきいて、ここにも聞こえない生徒がいるといった感じで集めたわけです。

私は校長先生の絵を少しずつ集めました。３人目の写真は教頭先生です。京都盲唖院を卒業した、少し見える弱視の方でした。舘井文次郎という方です。中林初太郎という方が学校の校長をしていて。舘井文次郎さんは学校の生徒たちの指導を担当していました。最初は視覚障害者の人、盲者だけ19人ぐらいだったのですが、その後、聾唖班ができた頃から、伊藤サトさんは入学したのです。

プロジェクターの写真の様子について説明します。校長先生が学校を経営するための、お金が無いので京都や奈良へ行ってお金を集めたりしていたようです。校長先生は大変厳しい方でしたが、口形を大きく動かして簡単な話しでコミュニケーションをしてくれました。どちらかといえば、視覚障害者は大事だけれども、ろう者はあまり大事にされなかったような気がします。

真ん中のひとは事務所に１人いた方です。米谷さんという方です。戦前、軍人を辞めて、盲唖学校に昭和７年に就職しました。その昭和７年は私が生まれた頃です。元軍人の方ですから、大変怖いイメージがありました。戦争に負けて、その頃は土肥校長先生という方が頑張っていたわけですが。戦争の混乱している間、盲ろう学校に入って聞こえない子供の指導をしていたわけです。

この写真を見てください。この写真は両親が撮ってくれたものです。長い間保存してくれていたのを本当にありがたく思っています。戦争でほとんど焼失してしまっているのですが、昭和19年にたまたま逃げた時に、そこに保存してあった写真です。

今、こういった写真は貴重だと思います。富山市に昭和20年10月に家を新築して、その時にたまたま発見した写真です。私が知らない所で母親が写真を隠していた中に入っていた写真です。「私のおかげだよ」と母に言われて、私はこの写真を発見しました。昭和10年代初め頃の写真です。私が真ん中に座っています。腹かけみたいなものをしています。

６歳になって、大人になるといった意味で学校の中で中心から少し離れた所に長屋を借りて生活していました。学校に入りたいと言って、学校に連れられて行って、真ん中に私が少し偉そうに座っています。回りは本当に大きな人達ばかりでした。昨日、大杉さんのお話にもありましたけど、６歳では本当は入学したら駄目だったのですが、わからないまま入学した時の写真です。お腹の所に“６歳”と書いてあります。

九州の長崎県から来た先生です。優しい先生で

した。口をはっきりと開けて話してくれた。厳しく教えて頂きました。素晴らしい先生でした。

平塚先生という先生ですが、スライドの右の方の写真の方になります。私は別れてしまって寂しかったのですが、伊藤さんは少し教わったのですね。先輩方は知っています。

次の写真は、私が学校に入る前の様子です。長屋の中の珍しい所などを私がイメージして描いたものです。少し不思議な所があります。日本海ガスという工場の近くにいたのですが、日本海ガスのタンクがありました。その近くに盲唖学校がありました。

戦前に卒業したのですが、先程の写真は盲唖学校の写真です。その学校は戦争で燃えたのですが、その近くに長屋があり、そこから学校に通っていました。この写真は先程、お話しましたけど、最初、昭和７年に県立盲唖学校として千石町にあったのですが、その後、昭和10年に長屋に入る２年前に私の母と、姉と一緒に話しをしました。

母の話を聞きますと、その富山県有の場所は、家庭が経済的に貧しい人たちが生活していた場所だったそうです。この写真の場所です。そういった不幸な子供たちが学ぶ学校があったのですが、その学校が他の場所に移って、その空いた校舎に盲唖学校が移転して入ったのです。

その後、空襲の前、昭和14年に新校舎が建てられました。これがその写真です。いろいろ県と交渉をした結果です。前の学校は歩いていると床がミシミシ鳴るような学校でした。盲の子供達に私は床をわざと叩いて悪戯をしました。それを盲の子供達は「ろうの子供達が悪戯をした」と先生に告げ口しました。そういう悪戯は止めるようにと怒られました。「僕じゃない、他の人だ」と言っても先生は怒っていました。

私自身、盲の生徒に対してそういった悪戯をしたことは、反省しています。そういう状況の時に新しい盲唖学校が建てられたのです。それが昭和14年です。以前は千石町に建っていたのが赤江の方に移転しました。私も初めは富山市中心部で生活していたのですが、盲唖学校の近くの長屋に引っ越しました。

伊藤：校舎が移転したのは、初等部の３年位の間は少しずつです。高等部1年になってまた移りました。手話などもいろいろ学びました。長屋の校舎を半分に分けて半分は和裁、もう半分はマッサージの訓練をしていました。学校は二階建てでした。左側の方が盲学校で、１階が勉強するところで、２階がマッサージをするところ。右側がろう学校で、１階が勉強、２階が和裁となっていました。真ん中の方に職員室がありました。

竹川：今、伊藤さんがお話した通りです。私（竹川）も校舎が焼け落ちずに残っていたのですが、昭和20年に消失してしまったのです。真ん中に入り口があるのですが、そこからは生徒は出入りしたらダメでした。生徒が入ると、「ここは生徒の通路じゃない」と言われていました。そういうルールがあって、入り口は左右あって、ろうの生徒は校舎に向かって右側の入り口、盲の生徒は左側の入り口と別れていました。真ん中は先生の入り口でした。私は少し不満だったのですが、先生たちの入り口の突き当たりには事務所がありました。先程、お話しました米谷先生が書記の如く、任命された厳しい先生でした。36年間勤めて辞められました。下駄箱は右側にありました。

昭和13年に６年生の時、木工を右側の奥の方でやっていました。マッサージは伊藤さんが言ったとおり、左側の校舎の２階です。左側の校舎では、盲学校の高等部の生徒が点字なども学んでいました。私も少し興味があって、盲の人の様子を見ながらドキドキしながら悪戯をして、驚かしたりしました。その様子を米谷先生が見ていて、私は首根っこを掴まれました。その時はとても痛かったです。死ぬかと思うくらいの勢いで引っ叩かれて、そこで叱られました。「ちょっと来い」と言われて、「ここからの出入りは禁止だ」と言われました。新しい学校でしたが、いろいろと悪戯をした記憶があります。

手真似で話しをしていると、手を棒で叩かれた

りしました。「先生たちも使っているのに、生徒にだけ怒るのはおかしい」と言いました。いろいろと先生たちとのやり取りもありました。

学校の校舎の裏側にはたまたま、大谷学校という私立のお寺が経営する学校がありました。女学校で宗教の学校でした。懐かしい思い出があります。体育の時間に、盲の生徒とろうの生徒が一緒に混じって遊んでいました。盲の生徒はゆったりとして、ろうの生徒は大騒ぎをして遊んでいました。ろうの生徒は鉄棒にぶら下がったり、競争をしたり、鉄棒で回転して上手い下手を競ったりしていました。授業が始まる時間になっても、この校舎（写真）の後ろにグランドがあったのですが、校舎の後ろの方に授業の始まりを知らせる鐘がありました。鐘が鳴ったら、盲の人達はみんな校舎の中に入って行きました。ろうの生徒は遊びに熱中していたので、授業が始まっても遊んでいた。「授業が始まるから早く来い」と叱られました。

そして、慌てて教室へ行きました。「鐘が鳴ったのに聞こえないのか？盲の生徒は授業が始まると教室に入ってくるのにお前たち（ろうの生徒）はなんだ？」と言われました。このような事が繰り返し起こったので、先生達も困って解決策として、旗を振ることになりました。先生達が話し合ってそういうやり方をしました。

窓から先生が授業を始めると旗を振るのです。何か尻尾みたいな感じで旗を振るのです。盲の生徒は授業が始まるとすぐに教室に入るのですが、聞こえない私たちは旗を見て教室に入ったのです。ろうの生徒は聞こえないから、鐘が鳴ってもわからないのです。その頃、先生の話はわからなかったです。伊藤サトさんの弟さんもろう学校にいました。その弟さんが現在、病院に入院しているそうです。私たちの協会の活動などにも協力していただいた弟さんが伊藤さんにはいます。

司会：いろいろと学校の様子や生活などの懐かしい思い出をいろいろお話していて、私も大変参考になりました。学校の中で初めから手話を使っていたのではなく、口話を使ったり、身振りをしたりして会話をしていったのですね。

例えば、「ダメ」とか手を合わせて「バス」とか少しずつ言われていって、その後、手話に初めて出会ったのは先輩達が手話で話しているのを見たのですか？そのあたりをお聞かせ下さい。

伊藤：初等部５年生か６年生頃だったと思います。役員の方が２人来て、筆談で紙を渡されてその後協会から葉書が来て「お金を出して下さい」と言われて弟と２人でした。ろうあ者は私ともう１人だけでした。次の年にまた葉書が来て友達から葉書をもらって、またそこへ行って、全国から集まった人達と1泊して翌日解散といったようなことを２回３回繰り返しました。それは止めましたが、例えば大きな家に集まって

竹川：少し補足します。このプロジェクターの絵に出ていますが、昭和20年の８月２日に空襲があったとお話ししました。その時、校舎が焼けてしまって、仮校舎がここに建ったのですが、１つの校舎が建つのが普通なのですが、その当時は２つに別れて仮校舎が建てられました。昭和23年までの３年間その仮校舎で学びました。

富山市の北部に海がありますが、海の近くで中心部から30分位の所で、少し田舎のほうですがそこにありました。そこで寄宿舎に入りました。戦争があった時の“日本海ドック”という工場の寮で、200人ぐらい泊まっていたといわれています。神通川の対岸の草島という所です。

昭和20年８月の終戦後、誰もいなくなって空いていましたが、学校がそこにふさわしいということでその寮を借りたようです。しかし、蚤(のみ)がいたり、畳も少し傾いていたりなど、大変嫌な思いをしました。そういった大変な校舎でした。

この40番の写真が私です。真ん中で黒い服を着ているのが佐々木校長先生です。盲とろうを差別するような先生でした。盲の生徒は非常に大事にする先生で、マッサージや鍼などは積極的にやっていたようです。そのせいか、ろうの生徒は悪戯ばかりしていました。

私が卒業する昭和23年の後に盲とろうが別れました。最終的に、戦争が終わった後の立山重工の工場を借りてそこにろう学校が出来たのです。針山先生はろう学校の高等部に入って手話が出来るようになったのです。この話しはさておき、この立山重工の跡地に県立のろう学校ができたのです。この校舎でいろいろな軍事物資を作っていたのです。

私は昭和23年の３月に卒業したので、新しい校舎には入っていません。佐々木校長が、県と交渉してろう学校がこの場所にできたのです。草島

の仮校舎は３年で終わってそこから引っ越して来ました。私はそれを聞いて大変びっくりして、自転車で古い学校を見に行きました。戦争中に使っていた工場に入って、盲学校は別になりました。

長い間、ろう学校と盲学校は一緒だったのですが、盲学校は以前、学校があった赤江の所に戦争のため燃えてしまった盲唖学校が昭和23年に“盲ろう分離”となり、昭和24年に盲学校が赤江の所に新しく出来ました。その後、盲学校は火事になって、また引越しすることになりました。盲学校だけ新しい校舎が建てられたわけです。

富山市の下奥井という所にろう学校は存在しています。盲ろう学校の時に、銅像があったのですが、並木校長先生の銅像です。千石町の２番目の校舎の時ですが、並木文衛門さんのお陰で校舎が出来たと建てられた銅像でしたが、戦時中、軍事産業に銅が必要であるとの事で、その銅像を提供することになりました。それで、軍隊に取られて無くなったのですが、その後、ろう学校には無いのですが、盲学校に新しい銅像が出来ています。そこに見学に行った時に撮った写真です。およそ13年位前の写真だと思います。

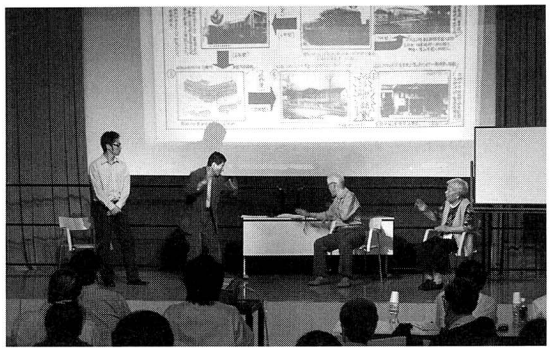
今、針山先生は養護学校に変わっていますけれども、その時に銅像の前で撮った写真です。

司会：ろう学校が移転した話しや、生活の様子をいろいろとお話しして頂きました。

竹川：もう１つ付け加えたいことがあります。昨日、戦争体験について話をしましたが、もう１つ皆さんに是非、見て頂きたい物があります。これは何かわかりますか？昨日、分科会の方で説明しましたけれども、改めてみなさんにお知らせしたいと思います。

昭和20年８月２日の大空襲の時に焼夷弾というものが、落されました。たくさんの焼夷弾が落されました。戦後、自分の家を建てることになって、地面を掘っていた時に、これが見つかりました。不発弾です。焼夷弾の一部です。最初はこれが何か分からなかったのですが、こっそりと、これを隠し持って保管していました。60年ぶりで懐かしいです。父はこれを傘の修理をする時に、金槌でたたく時の台として使っていたようです。そういった傷跡も残っています。大変貴重な物として大切に持っています。

司会：御二人のお話どうもありがとうございました。質問があるということです。日本聾史学会の伊藤会長からの質問です。



伊藤会長：もう終わりの時にすみません。昨日もいろいろとお話を聞きました。ろう学校の生徒の時に大地震も経験しました。家も何軒も倒れましたし、学校もその時倒れて無くなりました。私が学生の時でした。

福井で大地震が起こった時、募金活動などをやりました。福井地震の義援金のお願いをしました。手話で募金を集めたのですが、これは新聞などに大きく載りました。朝日新聞や毎日新聞です。ろう学校を建てるための義援金を一生懸命集めていると採り上げられました。そうやって集まった義援金を学校に渡しました。

そして２年後、福井に呼ばれて、ろう学校が倒れて、再建するための義援金を私たちが集めて寄付したのですよと伝えるために行きました。その頃にお会いしたと思います。本当に60年ぶりにお会いする事になりました。お元気ですか？いろいろとお話しして頂き、どうもありがとうございました。

竹川：皆さん、一生懸命、手話を見てくださってどうもありがとうございました。

司会：もう時間ですので、そろそろ終わりたいと思います。皆さん拍手をお願いします。

竹川：これは私が作った写真、図です。どうぞご覧下さい。どうもありがとうございました。に新しい銅像が出来ています。そこに見学に行った時に撮った写真です。およそ13年位前の写真だと思います。

今、針山先生は養護学校に変わっていますけれども、その時に銅像の前で撮った写真です。

司会：ろう学校が移転した話しや、生活の様子をいろいろとお話しして頂きました。

竹川：もう１つ付け加えたいことがあります。昨日、戦争体験について話をしましたが、もう１つ皆さんに是非、見て頂きたい物があります。これは何かわかりますか？昨日、分科会の方で説明しましたけれども、改めてみなさんにお知らせしたいと思います。昭和20年８月２日の大空襲の時に焼夷弾というものが、落されました。たくさんの焼夷弾が落されました。戦後、自分の家を建てることになって、地面を掘っていた時に、これが見つかりました。不発弾です。焼夷弾の一部です。最初はこれが何か分からなかったのですが、こっそりと、これを隠し持って保管していました。60年ぶりで懐かしいです。父はこれを傘の修理をする時に、金槌でたたく時の台として使っていたようです。そういった傷跡も残っています。大変貴重な物として大切に持っています。

司会：御二人のお話どうもありがとうございました。質問があるということです。日本聾史学会の伊藤会長からの質問です。

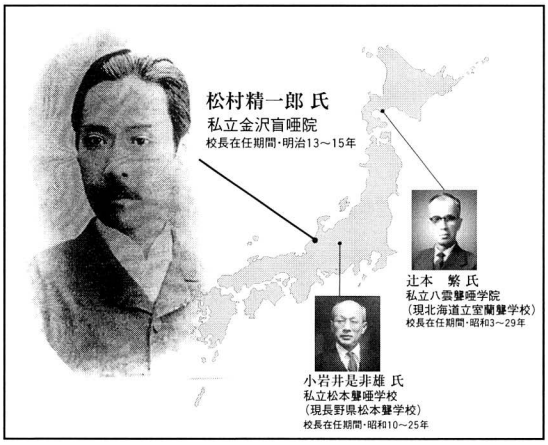
伊藤会長：もう終わりの時にすみません。昨日もいろいろとお話を聞きました。ろう学校の生徒の時に大地震も経験しました。家も何軒も倒れましたし、学校もその時倒れて無くなりました。私が学生の時でした。

福井で大地震が起こった時、募金活動などをやりました。福井地震の義援金のお願いをしました。手話で募金を集めたのですが、これは新聞などに大きく載りました。朝日新聞や毎日新聞です。ろう学校を建てるための義援金を一生懸命集めていると採り上げられました。そうやって集まった義援金を学校に渡しました。

そして２年後、福井に呼ばれて、ろう学校が倒れて、再建するための義援金を私たちが集めて寄付したのですよと伝えるために行きました。その頃にお会いしたと思います。本当に60年ぶりにお会いする事になりました。お元気ですか？いろいろとお話しして頂き、どうもありがとうございました。

竹川：皆さん、一生懸命、手話を見てくださってどうもありがとうございました。

司会：もう時間ですので、そろそろ終わりたいと思います。皆さん拍手をお願いします。

竹川：これは私が作った写真、図です。どうぞご覧下さい。どうもありがとうございました。

■ 日本のろう校長は３人 ■